『総合政策論叢』第22号（2012年２月）
島根県立大学 総合政策学会

〈研究ノート〉

地域に根ざした英語教育

── 地域資源に注目したライティングの事例から ──

江　口　　真理子

１．はじめに
２．「地域」の概念
３．大学教育における「地域」
４．地域資源に注目したライティング授業
⑴地域資源
⑵科目
⑶指導者
⑷経過
⑸授業アンケートの結果
⑹英語教育効果
⑺地域貢献効果
５．終わりに

１．はじめに

最近「地域に根ざした大学」というスローガンが頻繁に使われるようになってきた。平成17年１月に提出された中央教育審議会答申「わが国の高等教育の将来像」では、大学の主要な役割の一つとして地域社会の発展に役立つことが明記された（文部科学省，2005）。各大学においては、18歳人口の減少・国公立大学の法人化・大学間の競争を背景に、地域との接点を積極的に開拓している。大学の地域連携に関するアンケートによれば、現在、89.5％の大学と77.4％の短期大学が地域連携センターを設置し、地域との連携強化に取り組んでいるとされる（日本私立学校振興・共催事業団，2008）。地方公立大学の一つである島根県立大学も同様である。島根県立大学は学則第１条に「世界的視野に立った地域研究活動と教育研究成果の幅広い社会還元を通して、学術文化の進展と地域社会の発展に寄与することを目的とする」と地域貢献を大学設置の理念とし、地域に根ざした大学をアイデンティティとしている。

今や地域との連携は大学経営上の重要な方策となっているが、英語教育においては地域との連携はどのような意義があるのだろうか。地域の国際化を推進するという側面では大学英語関係者の人的資源を地域に還元することができよう。しかし、日本の英語教育は基本的に日本国内の事情を取り上げることに無関心である。鈴木（2010，p.27）は日本における外国語教育は太古の昔から一貫して外国の優れたものを吸収することによって、遅れ

た日本を進歩させるという目的があったと述べている。大学英語教育は日本語の資料しかない地域とどんな連携ができるのだろうか。英語をマスターしていない学習途中の学生が地域にどんな利益を還元できるのだろうか。英語教育における地域連携に居心地の悪さを感じるのは筆者だけではないだろう。

しかし、近年、英語教育においても地域を視野に入れた実践が生まれている。地域の文化を英語の授業に取り入れたり、地域の人々と積極的に関わるような英語教育の実践が報告されるようになってきた。この新しい動きは英語教育にとってどのような可能性を拓くのだろうか。

本研究はこの疑問に答えるために、地域と英語教育の接点を考察した。まず、「地域」という概念を明らかにし、大学教育および英語教育における地域連携の意義を考察する。次に、地域資源に注目したライティングの事例を振り返り、地域とのどのような連携が英語教育に有効なのか、どのような地域貢献効果があるのかを考察する。最後に、今後の大学英語教育の方向性を展望する。

２.「地域」の概念

「地域」は漠然とした概念である。英語教育と地域の接点を探求する前に、「地域」という概念を明確にしておきたい。

「地域」とは「区切られた土地」を元々意味するが、どこで区切りを行うかは明確ではない。「地域」を英語に直すと “region” “area” “community” が近いが、漠然としている。市町村のように明確に定義された行政区画、地形や気候といった自然の力によって分けられる地理的範囲、文化や歴史によって分けられる範疇もある。研究対象として「地域」という言葉を使うとき、「北東アジア地域」や「中山間地域」のように空間的に伸縮自在な概念となる[1)]。このように、「地域」とはミクロな世界からマクロな世界まで、語り手の恣意で任意に切り分わけられる連続的概念である。

また、「地域」は単なる地理的空間でないことも明らかである。「地域」という語には、その土地の住民、経済活動、制度、文化など次元の異なる概念も内包されている。三橋（2007）は地域を「企業や大学、研究者等の個々の関係者が意識・イメージする空間的な仮想概念の範囲」としている[2)]。

ただし、「地域に根ざした大学」というスローガンが掲げられる時、この表現は語り手の生活圏に限定されると思われる。地方自治体が設置母体となっている地方公立大学の文脈で「地域に根ざした大学」といえば、「地元」の地方自治体を指すとみなして支障はないだろう。例えば、島根県の浜田市、出雲市、松江市にキャンパスを構え、島根県が設置母体となっている島根県立大学の場合、その語り手は島根県をイメージして「地域」を語っていると考えられる。また、浜田キャンパスの場合は浜田市周辺、出雲キャンパスの場合は出雲市周辺、松江キャンパスでは松江市周辺を指すと考えることが自然である。

３．大学教育における「地域」

大学教育にとって地域は教育テーマの資源および教育実践の場としての価値がある。地域には解決を迫られる様々な問題があり、それらは教育の媒体として大学教育に役立つものである。例えば、大学教育は、医療問題・福祉問題・経済問題・都市問題などの問題を

持つ地域と協力することによって、学生はそれらの問題について書物からではなく現場から知識を得ることが可能となる。現場から知識を得ることは教育上有効である。なぜなら現場の体験から得られた知識は講義や本から得られた知識よりも具体的で印象深いため記憶に残りやすいからである。また、地域は知識の宝庫としてだけでなく実践の場としても機能する。学生は教室で学んだ知識や技術を地域で実際に使うことによってさらに学びを深める。その過程において学生は人間的に成長するのである。地域連携を教育プログラムとして開発した取り組みを見ると、教育上の地域連携は知識や技術だけでなく、コミュニケーション能力や積極性といった全人格的な成長を促す効果を持っていることが指摘されている（福原他，2006）。

最近は大学英語教育においても地域との連携が射程に入るようになってきた。**表1**は地域連携を視野に入れた外国語教育の取り組みで文部科学省から特別な財政支援を受けた事例である。

表1　財政支援を受けた地域連携型外国語教育の取り組み

財政支援カテゴリー	年度	機関	取り組み
現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム	16年度	東京外国語大学	在日外国人児童生徒への学習支援活動
		昭和女子大学	専門を生かした体験型海外留学制度の展開―英語でフィールドワークやインターンシップに挑戦―
	17年度	東京国際大学	「小江戸川越」国際都市化支援プロジェクト―地域翻訳力を持つ学生・市民の育成―
		高岡短期大学	非言語と言語の融合による地域国際化教育―世界に開かれた高岡まちづくり―
	18年度	関西外国語大学	学生人材バンクによる地域国際化の推進
質の高い大学教育推進プログラム	20年度	立命館大学	地域社会問題を学生創造力で解く学びの仕組
		鹿児島純心大学	新時代を開く教師養成モデルの構築
新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム	20年度	上智短期大学	サービスラーニングによる学生支援の総合化―ライフデザインと社会人基礎力の養成―

これらの取り組みは教育テーマの資源や教育実践の場として地域を活用したものである。これらの取り組みのいくつかを検討した後藤（2011）は、地域連携は、英語学習効果だけでなく、異文化理解の促進や地域の観光振興等の利点を挙げ、「地域に立地する高等教育機関として、社会のために英語を使う、地域社会のために英語を使うという観点があってもよいと思われる」と英語教育の新しい方向性を示している。同様に、北海道の地域情報を英語でアウトプットする授業を展開した遠藤（2008）は、「地域の情報を英語で発信できる人材の育成は北海道における英語教育のひとつの使命ではないだろうか」と問いかけている。

４．地域資源に注目したライティング授業

地域と連携した英語教育による英語学習効果や地域貢献効果に関する研究はわずかな例（成瀬，2004、遠藤，2008、田林他，2009）があるのみで、理論的考察や実証研究が不十分である。地域とのどのような連携が英語教育効果を持つのか、または、どのような地域貢献効果を持つのかはまだ十分に理解されているとは言いがたい。日本語しか使えない地域を英語教育のフィールドにすることと、英語のプロではない半人前の技術しか持たない学生にどんな地域貢献ができるか、英語教育効果と地域貢献効果に不安を覚えるのは筆者だけではないと思う。

そこで地域と連携した英語教育の英語教育効果と地域貢献効果を探求するために、筆者は平成20年春学期にパラグラフレベルのライティング力を養成する科目である「英語上級ライティングⅡ」において、地域資源に注目したパラグラフ・ライティングの指導を行ってみることとした。以下では、そのような実験的授業を行うに至った背景と考え方を記述する。

⑴地域資源

島根県立大学が立地する島根県浜田市には「黄長石霞石玄武岩」という自然資源がある。黄長石霞石玄武岩は約600万年前に噴火した溶岩で、黄長石と霞石を同時に含むという特性がある。この現象は唯一浜田市で産出する玄武岩に見られ、地質学的に貴重な岩石とされる。昭和41年には島根県の天然記念物に指定された。黄長石霞石玄武岩の岩塊は日本海に面した長浜台地に多数分布している。噴火口跡があるゴルフ場を取り囲む民家の庭先や道路沿いに黒い巨石が露出している。大きな岩塊の前には地元の愛好家らが付けた名前入りの立て札があり、曲がりくねった里山の道を散策することもできる。ユニークな形の巨石が点在する里山の風景や緑豊かな散歩コースは観光資源となる可能性を持っている。

しかし、黄長石霞石玄武岩の存在はあまり知られていない。第二次世界大戦中に戦闘機に使うガラスの透明度を上げるために採掘されたこともあったが、産業や観光業に活用されることなく現在に至っている。浜田市内の小学校には黄長石霞石玄武岩が展示されているのだが、自然の中に露出した岩塊を見たことがある市民は少ない。島根県立大学の学生はその存在をほとんど知らないと言ってよいだろう。大学の近くに貴重な地域資源が眠ったままになっているのは残念なことである。そこで、この岩石について学び、情報を発信する英語の授業を行い、英語教育と地域貢献の関係を探求することとした。

⑵科目

この探求は３年生の選択科目である英語上級ライティングⅡという科目で行うこととした。英語上級ライティングⅡはパラグラフの構成法を身につける科目である。「主題文」「支持文」「空間順」「時間順」「過程順」「定義」「比較」「対照」「例示」「原因」「結果」等のパラグラフ・ライティングの技術を習得することが第一の目標である。この科目は３年生以上を対象とした選択科目で、１コマ45分の授業が週に２回の１単位の科目である。

ライティングの授業を使って地域との接点を見いだそうとした理由は、３つある。まず、ライティングがアウトプットを目的としているからである。英語のリーディングやリスニングの授業で使えるような地域資源についての媒体はほとんどない。地域の文化や情報は日本語で蓄積されている。また、その知識を持つ人はほとんど日本語話者であるため、教室に来てもらって話をしてもらうというような活動はできない。つまり、地域資源はイン

プットを目的とする授業では使うことができない。しかし、地域資源をアウトプットの素材にすれば英語の授業として成り立つ。地域の文化を日本語で吸収し、英語でアウトプットすれば、ライティング力やスピーキング力を養成できると考えた。

今回、スピーキングではなく、ライティングの授業で地域との接点を探求した第二の理由は、ライティングの授業のほうが、日本語のインプットを英語のアウトプットにしやすいと考えたからである。日本語でインプットされた内容を英語でアウトプットするには翻訳という作業が絡むため、アウトプットに時間がかかる。翻訳しながらのスピーキングは、プロの通訳レベルでなければできない高度な英語力を必要とする。一方、ライティングは自分のペースでゆっくりアウトプットできるため、英語力が低くても書くことはできる。

パラグラフレベルのライティング科目を使った第三の理由は、パラグラフ展開法の文法的項目と地域資源の内容を統合することができると考えたためである。センテンスレベルのライティングでは、センテンスの構造を教えるため、まとまった文章を書くことには適さない。一方、パラグラフレベルのライティングは、いくつかのセンテンスからなるまとまりのある文章を書くことを目的としている。例えば、「空間順」について教えるときは、学んだ技術を使って黄長石霞石玄武岩の分布を描写することができる。したがって、パラグラフ・ライティングの文法項目を教えることを第一の目標として、地域資源について学びそれについて英語でアウトプットすることを第二の目標とした。

⑶指導者

英語上級ライティングⅡは英語科目であるが、扱う内容は科学の分野の内容であった。筆者は英語教育を専門とするため、自然科学は専門外で岩石の知識は全くない。したがって、筆者がこの岩石について説明することは不可能であった。そこで、専門家の力を借りることとした。幸い地域にこの岩石について詳しい地学者の桑田龍三氏がおり、講師を引き受けてもらえることになった。

⑷経過

授業は４月から７月までに30回分行った。１回の授業は45分であった。しかし、まとまった時間が必要なときは、日程調整をして90分に変更したり、昼休みを移動の時間にあてた。

桑田氏には平成22年４月26日にこの岩石の地学的特質、生成過程、分布地帯の地形等について、日本語で講義をしていただいた。**図１**は講義の様子である。次に、５月10日に実際に岩石が点在している浜田ゴルフカントリーリゾートの周辺を歩きながら解説していただいた。**図２**は視察の様子である。

図１　桑田龍三氏による講義

図２　現地視察

現地視察の後、学生には黄長石霞石玄武岩を使った地域活性化策を考案させた。学生４人から成るグループを作り、グループ単位で黄長石霞石玄武岩を用いた地域活性化策をブレーンストーミングさせた。アイディアが膨らんだところで、実際に試作品を作成するように指示した。制作にかかる費用は研究費から支出した。学生らは苔むした岩塊を模したチョコレートケーキ、岩塊のユニークな名前にインスピレーションを得たキャラクター、そのキャラクターを使ったパズル、岩塊の分布状況が一目でわかるジオラマ等を制作した。ジオラマの制作には、島根県立浜田高校の阿部志朗教諭に指導していただいた。制作は授業時間以外に学内や自宅で行った。学生は協力しながら課外の活動に参加し、英語の選択科目というよりは、ゼミのような一体感さえ感じられた。**図３**はジオラマ制作の様子である。

特にジオラマ作りに関わった学生の参加は驚くべきものがあった。作成したジオラマは縦78センチ、横100センチ、高さ24センチの大きさで、縮尺3000分の１の地形を忠実に再現した本格的なものであった。目標が高かったため、全員が何らかの作業に関与した。地図の作成、ボードのカット、配色、電飾、箱作り等、完成までには様々な能力が必要とされた。ジオラマ制作に熱を入れた学生数名はライティングの授業が終了した後でも筆者の研究室で作業に没頭した。最終的には、スイッチを押すとLEDが光って岩塊の所在地を知らせる仕掛けが入った立派なジオラマが完成した。ジオラマを制作した学生は卒業論文に匹敵する思い出ができたと満足げであった。

図３　阿部志朗氏によるジオラマ制作指導

授業ではパラグラフの展開法を教え、その展開法に基づいたパラグラフを課題として提出させた。「主題文」「支持文」「空間順」「時間順」「過程順」「定義」「比較」「対照」例示」「原因」「結果」という単元毎に課題を出し、すべて黄長石霞石玄武岩にまつわる内容について書かせた。学生の課題に対する取り組みは意欲的で途中で放棄した学生１名を除き、全員がパラグラフの展開法を一通り習得した。

学生の学習成果は二つの方法で外部に発信した。平成22年７月23日に学内で黄長石霞石玄武岩を用いた地域活性化のミニ発表会を行った。発表会は日本語で行った。教職員３名、新聞記者１名、市会議員１名、行政関係者１名、市民３名と桑田龍三氏、阿部志朗氏の合計11名の方が参加して下さった。発表会では参加者から学生の試作品やアイディア対して、助言や感心の言葉が述べられた。

また、学生の書いた英語のパラグラフは英字雑誌に掲載し、広く配布した。学生はIllustratorという出版用のソフトを使ってパラグラフと写真をレイアウトした。筆者が体裁を整え、英字雑誌のReal Reporter Magazine No.13に掲載した。Real Reporter Magazineは島根県立大学が北東アジアの大学と協力して出版している英字雑誌である。筆者はReal Reporter Magazine No.13を1000部印刷し、中国・韓国・ロシアの大学生、地域の教育・行政機関、学内の学生と教職員に配布した。

⑸授業アンケートの結果

７月22日に「英語上級ライティングⅡ」の受講者16人に対してアンケート調査を行った。「英語学習」「貢献感」「愛着心」に関して肯定的な結果が得られた。

英語科目で英語教育効果がないのは意味がないので、英語学習効果についてまず尋ねた。「この授業を通じて英語ライティングの知識と技術が豊かになったか」という質問に対して、「非常にそう思う」が38％、「そう思う」が56％で、94％の学生が肯定的に答えた。学生の主観的な判断では英語学習効果が認められた。

次に地域貢献の効果について尋ねた。「この授業を通じて、島根県の観光振興問題の解決に貢献することができた」という項目では、「非常にそう思う」が12％、と「そう思う」が37％、合わせて49％であった。「この授業を通じて、地域への愛着心が深まった」という項目では、「非常にそう思う」が13％、「そう思う」が56％、合わせて69％であった。英語を純粋に学ぶ科目で同じ質問をした場合、このような答えにはならないと考えられるので、学生は主観的に微力ながらなんらかの地域貢献をしたと感じたようである。

⑹英語教育効果

学生の主観的な印象は英語教育効果があったとする結果であったが、地域資源に注目したことがどのようなメカニズムによって英語教育効果をもたらしたかは不明である。

地域連携が英語教育に役に立つ要因は二つ考えられる。一つはリアリティのある体験が英語表現の発露を促進する点である。この授業では、現地視察があり、民家の庭先に露出した岩塊を発見したり、林の中にそびえ立つ岩の壁に圧倒されるという感動があった。そのような体験は本で読んだり写真で見るだけでは伝わらないものである。また、現地視察では岩を誇らしげに語る地元の人との交流もあった。教室を出て地域に出かけていく体験が英語によるアウトプットを容易にしたのではないだろうか。

もう一つ考えられることは、内容の深い理解と創造的なアイディアが表現意欲を刺激したことである。英語が書けないという学生の中には、伝えたい内容がない、または、内容

について理解が浅いため何も言葉が出てこないということがよくある。文章を書くという行為は自分の心の中からほとばしる感動を知らしめたいという意欲があって成立する。今まで知らなかった地域資源に触れ、それについて詳しく理解し、地域資源の持つ可能性を世界に伝えたいという強い願望が生じ、それがライティング力向上につながったのではないだろうか。

しかし、この授業では地域資源を扱う以外に英語教育効果を上げる様々な工夫があった。例えば、グループでの制作活動も英語学習に影響を与えただろう。この授業では試作品を作ったため、芸術的能力、発想力、料理の能力、手芸力、計画力、コミュニケーション力など学生の様々な能力が存分に発揮された。通常の英語の授業では発揮できないような能力が生かされてゴールにたどりつくという創造的な体験が英語学習に意義を与えたのかもしれない。

また、トピックを一つに限定したことも学習効果に結びついた可能性がある。一般的に、パラグラフ・ライティングの教科書はパラグラフ展開法に準じており、教科書のモデル文は様々なトピックをカバーしている。授業では様々なモデル文を使ってパラグラフ展開法を解説したが、学生にパラグラフを書かせるときは、すべて黄長石霞石玄武岩にまつわる内容について書かせるようにした。トピックを限定し、同じジャンルの語彙を何度も使ったことにより、英語を書くことが簡単に感じられたのではないだろうか。筆者自身もこの授業を通じてやっと黄長石霞石玄武岩を“melilite nepheline basalt”と発音できるようになった。

さらに、この授業ではパラグラフを雑誌という媒体に載せて発信するという活動も含まれていた。教室内だけでアウトプットするのではなく、外の世界に情報発信することは自分の書いた物が人の目に触れることを意味する。メッセージの受け手が実在する本物のコミュニケーションが英語を現実社会で役立つものに変えたため、英語学習意欲が増したとも考えられる。

このように英語学習を促進する要素はこの授業実践の中に多く含まれており、それらの要素を排除できなかった。したがって、地域連携に英語教育効果があったと断言することはできない。

⑺地域貢献効果

地域貢献効果に関しては、直接的な地域貢献効果があったと言える。地域貢献の一つは履修学生が地域資源について知識を深めた点である。島根県立大学の学生は約半分が県外出身者である。全国的に知名度が低い島根県にとって島根県の地域の特徴を学生に知ってもらうことは地域の構成員としての自覚を促す上で重要である。この授業では浜田市出身者が一人いたが黄長石霞石玄武岩について知っている者は誰もいなかった。地域資源を活用した英語ライティングの授業は、学生が地域資源について理解を深めたという点で地域貢献であった。

また、この地域について愛着を感じさせることができたという点においても地域貢献をしたと言える。島根県は多くの若者が高校卒業と同時に県外に流出し、その後も帰ってこないという問題を抱えている。特に島根県西部は人口減少が激しく、コミュニティとしての存続が危ぶまれる地域がある。若者が地域に定住するには、所得を保証する職業も重要であるが、地域に対する愛着が重要である。愛着は地域のコミュニティの維持にとって重

要な要因であると言われている（鈴木，2008）

学生の考えたビジネス・アイディアは実現されることはなかったが、学生の活動は地域資源の再生産につながった。学生たちが制作したジオラマは平成22年11月20日から23日まで出雲科学館で展示された。平成23年３月18日には島根県立大学の卒業式会場でも展示された。その後、平成23年５月に、浜田市浜田郷土資料館の常設展示物となった。この一連の経過は地方の新聞に４回報道され、地域の人々に黄長石霞石玄武岩の存在を知らしめる契機となった。Real Reporter Magazine上においてもこの地域資源について情報発信した。また、ジオラマが郷土資料および社会科教材として利用できるようになった。このような地域資源の再生産は次の世代に資源を引き継ぐという意味で地域貢献をしたと言えよう。

５．終わりに

本研究は地域貢献という大学の使命に対して大学英語教育がどんな役割を果たせるかを考察した。地域資源に注目した英語のパラグラフ・ライティングの事例を検討した結果、英語教育効果に関しては、研究の手法に問題があったため、地域連携が英語教育効果を有するメカニズムは不明のままであるが、何らかの効果があることが推察された。一方、英語科目での地域連携が地域貢献となったかという論点については、学生の地域理解向上と愛着心の形成、および、地域資源の再生産という意味において、地域貢献となったと結論づけた。地域連携を視野に入れた大学英語教育に英語学習効果の可能性と地域連携効果があると指摘した本研究は、英米世界に目を向けてきた英語教育に「地域」という新しい対象を示したという点で意義があると言える。

本研究は英語教育と地域連携の一断面を提示したにすぎない。英語教育と地域連携には様々な形態が考えられる。学生が地域の資源となって貢献する活動も可能だろう。学生をリーダーとした子ども対象の英語キャンプ[3)]があれば、地域の子どもたちの教育に役立つと同時に、大学生のリーダーシップや英語スピーキング力の向上にもつながるだろう。学生が地域のウェブページを英語で作成[4)]すれば、地域の情報発信や観光振興に役立つと同時に、大学生のリサーチ力や英語ライティング力の向上に役立つだろう。

地域連携を企てる英語教育には様々な課題もある。一つは学習途中にある大学生の英語を果たして社会に還元していいものかという問題である。大学生の発音や文法は役に立つどころか害になるという考え方もある。特に耳が敏感な子どもたちに聞かせるにはふさわしくないという批判がある[5)]。大学生の発音と文法を訂正することにした場合、指導者には多大な負担がのしかかってくる。間違いやエラーの訂正をすべきかという点も地域連携を行う英語教育の論点である。また、英語を専門とする英語教師が英語以外の専門に踏み込むことに対する抵抗もある。英語教育は英語だけを教えるべきであるという考え方と、何か中身のある内容を英語を通じて教えるべきであるという考え方が対立している。さらに財源の問題もある。今回の実践は島根県立大学の研究費を使って試作品制作や学外講師の謝金に充てた。地域と連携する上で何かを実施したり制作したりするためには財源の確保が必要であるが、現在のところ恒常的な財源はない。これらの課題も含めて、今後、地域と連携する英語教育を研究していくつもりである。

注

1）「地域」概念を検討した山中（2009）によれば、「地域」という概念は地理学の分野で最初に用いられ、地理学者の三澤勝衛は1931年に「地域」を広くアジア大陸から、屋敷の一室まで「地域」として扱えると引用している。

2）communityという語も連続性を持った多義語である。ごく小さな地域社会から国際社会までを表すことに用いられる。

3）島根県立大学では平成21年と22年に学生を運営者に加えた英語キャンプを実施し、地域の子どもたちに英語学習の機会を提供した。Talk NEAR English Day Camp（http://lms.u-shimane.ac.jp/~eguchi/wintercamp/wintercampjp.html）

4）島根県立大学総合政策学部ケインゼミで制作した石見地方の観光ガイドの例がある。Iwami Travel Guide（http://iwamitravelguide.wordpress.com/）

5）Talk NEAR English Day Campに参加した子どもの保護者から大学生の発音が日本語風であるという指摘があった。

引用文献

遠藤昌子（2008）「地域情報発信型の英語教育の可能性　英語オーラルガイド授業の実践報告」『札幌大学女子短期大学部紀要』第51号、５-38

日本私立学校振興・共済事業団（2008）「『学校法人の経営改善方策に関するアンケート』報告　大学・短期大学法人編――少子化時代を生き抜く――」『私学経営情報』第26号

後藤隆昭（2011）「大学英語教育における地域発信ライティング授業に関する研究――現状と課題――」『熊本大学社会文化研究』第９号、185-198

鈴木孝夫（2010）『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書

鈴木春菜・藤井聡（2008）「『消費行動』が『地域愛着』に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文D』第64巻２号、190-200

田林葉・西出崇・宮浦崇・重盛臣広（2009）「英語教育の国際化――政策科学部学士過程における実践型英語ライティング――」『立命館高等教育研究』第９号、109-124

成瀬喜則（2004）「地域理解を目的とした英国とのテレビ会議交流学習」『教育情報研究』第20巻第２号、27-35

三橋浩志（2007）「地域産業政策における『地域』概念の変化――クラスター政策を中心に――」『地域政策研究』第９巻第２・３合併号、229-239

山中知彦（2009）「都市計画・まちづくりにおける『地域』概念に関する考察――新潟県域を例示として――」http://unii.sakura.ne.jp/lre/ 6 /

文部科学省（2005）「我が国の高等教育の将来像（答申）」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo 0 /toushin/ 05013101 / 002.htm

〔付記〕

本研究は平成22年度島根県立大学学術教育研究特別助成金（研究テーマ：英語の知識と技術を用いた地域課題へのアプローチ）による研究成果の一部である。本研究を実施するにあたっては、黄長石霞石玄武岩の専門家でおられる桑田龍三先生と島根県立浜田高校の阿部志朗先生に多大なご助力と支援を賜りました。改めまして心よりお礼申し上げます。

キーワード：地域連携　英語教育　ライティング

（Eguchi Mariko）

Community-rooted English Language Education: A Case Study of Writing Instruction Focusing on a Community Resource

Mariko EGUCHI

This study explored the interface between university's contribution to community development and college English language education in the EFL context. First, this study pointed out the possibility of collaboration between college and community, reflecting lack of awareness of English language teachers toward the non-English speaking community of Japan. Second, this study reported the benefits of focusing on a community resource in a paragraph writing course; namely a positive effect on English writing ability, enhanced understanding of the community, creation of a sense of attachment to the community and creation of further community resources. Lastly, this study presented the possibility of community-rooted English language education in Japan.